

| | |
|----------|---|
| 氏名 | 滝澤水瑠 |
| 学位の種類 | 博士（美術） |
| 学位記番号 | 博美第333号 |
| 学位授与年月日 | 平成23年3月25日 |
| 学位論文等題目 | 〈作品〉「留守の丘」、「闇の伏線」、「contrast」 〈論文〉「境界の陰翳」－囲いの破れ目－ |
| 論文等審査委員 | |
| （主査） | 東京芸術大学 教授（美術学部） 田中一幸 |
| （論文第1副査） | 〃 〃（〃） 佐藤道信 |
| （作品第1副査） | 〃 〃（〃） 三田村有純 |
| （副査） | 〃 〃（〃） 橋本明夫 |
| （〃） | 〃 講師（〃） 藤原信幸 |

（論文内容の要旨）

ある物事に会ったとき、対峙するそのものを感じているようで、別のものを意識していることがある。それはそのものの周辺に落ちる影のようなもので、実体と対を成す存在である。連想しているのか、記憶の一片と触れ合っているのか、または見立てと呼ぶべきものであるかもしれないが、後でその“別のもの”を思い出そうとしてもなかなか出てこない。連想という未来への時間軸と、記憶という過去への時間軸が混ざり合っているからかもしれない。曖昧な輪郭のそれが目の前に現れたら、それを種にまた反応を繰り返すのだろうか。

その輪郭がぼやけている“別のもの”を私に想起させる物事の中で、中がからっぽの囲われた場所・場面のイメージが多くを占めている。それは小屋であったりトンネルであったり、壊れた箱であったりする。空虚を囲うかたちであり、何らかの気配と余韻を感じさせる時間でもある。それらの囲われた場所には隙間や穴が共存していて、外部と内部の遮断を不完全にし、“あちら側”を意識させる導線の役割を果たしている。私は“あちら側”というのは、物理的な裏側、または冥界やお伽話の世界のことではないと感じている。そして、そのような場所に表出するわずかな闇の向こうに、いま私が存在しているこちら側の世界と同等、もしくはそれ以上の大きな存在を感じるのである。その不完全な囲いに対峙するという体験から浮上した“別のもの”は、記憶の中で時間とともに形や印象が少しずつ抽象化されていく。ひとつひとつが完成品を忘れた部品のように断片として残され、また新たな物事との出会いに影響する。このような循環は、自分自身と外部との間に安心感をもたらす仕切りの役割を果たしながら、ある瞬間を選んで「破れ目」をつくり、私に不安感と高揚を与える。それは静かな湖の水面に、一滴の雫が落ちたような出来事であり、私の内部に波紋が広がる。そしてこの不安感と高揚という二面性は、対象に奥行きを持たせ、私を魅了する。自分の視点からは見えない裏側や深みを感じさせてくれるのである。そこにこの世界が持っている強さ故の脆さや、存在することの儂さや美しさを見いだそうとしている。そういった「境界」と「囲い」に対する心理状況を分析しながら、単なる窓や出入り口ではなく、本来不可視である「破れ目」から漂うものについて注目し、造形として表現する際の一つの出発点とする。

私は「囲い」の場所に、物理的な視覚情報を超えた残像のようなものを感知することがある。周囲よりも印象の密度が濃い残像である。これは冒頭で述べた、“別のもの”に通じているイメージの一片であり、鮮烈というよりは常に一定の深さに沈んでいて、ある瞬間に水面に浮上するといった存在である。

この経験によって、私はその沈んでいたものをそもそも知っていて、その時に「思い出した」ということを確認するのである。様々な経験において、印象の密度は常に一定なものではなく、水面下に潜む主観的な要素によってムラを成すのではないかと考える。つかみどころがなく、捉えたとしてもすぐに形を変えて浮遊するそれは、あちら側とこちら側の世界を区切っている境界の破れ目からこぼれた、陰翳の一角なのではないだろうかと考えている。視覚的な囲いと心理的な囲い、そしてその破れ目とを重ねて、境界に漂う陰翳の存在を具体的にしていこう。

本論文の構成は、以下の通りである。

第1章では、「境界」と「囲い」についてそれぞれ言葉の意味を解釈し、それが私にとってどんな存在であるのか具体例とともに紹介する。私が重要と考える境界のあり方は、それが存在することによって我々の心に約束事をつくり、それが無くなることによって境界の存在そのものを忘れるというものである。そして時間と空間に輪郭をつけることで可視化される囲いと、それに付随する空間構造を述べ、囲いという言葉の共有をはかる。特に日本家屋には、表と裏にまつわる空間概念が強く残っていること、また空間を仕切ることに於いて、固定ではなく仮設もしくは可動式のものが発達したことなどを例に挙げる。そこで表面化されてくるものは、変移を肯定し曖昧な輪郭が触れ合う領域、つまりグレーゾーンの存在である。この章を通して述べていることは、物理的な形や空間が、心理的なものに影響をもたらすということである。

第2章ではその様な心理的要素に注目し、安定の中の不安定や違和感、時間をもたらす印象の抑揚について掘り下げる。そして「破れ目」が囲いに現れるとき、どのような感情が生まれるのかを具体例とともに考察する。物理的に裂けることや壊れるということではなく、無秩序や不完全な状態を「破れ目」として捉え、その特徴を探る。また外側から暗闇を感じることや、裏側への怖れと憧憬について触れ、主観的な距離感について述べる。対象と私との距離は常に一定ではなく、私はその大きさや奥行きを確かめるように物事に対峙するのである。この不安定な心理的要素が印象の密度にムラを与え、物事の陰翳を織りなすのでありと考える。

第3章では、日常や制作する過程において、私が木とどう向き合っているかについて述べる。木は生物でもあり、素材でもある。このことを、できるだけ丁寧に見つめることで、私と木との間に一線を画する。また、造形表現をする上で知識や技術がどのように関わりを持つのか、経験とともに考察する。そして木材に魅力を感じ、感情移入する要素を挙げながら、木と私の関係を展開する。木工には欠かせない道具やその仕立ての存在についても触れる。

第4章では、実際に「境界の陰翳」と「囲いの破れ目」をどのように作品化していくのか、自身の過去の作品や提出作品と、その制作過程における要点とともに説明する。作者が作為的につくる破れ目と、無作為にできる陰翳とのバランスを取りながら、一つ一つの時空間を見えるかたちにする。

終章において、境界、囲い、陰翳、破れ目、あちら側、残像といったキーワードが少しずつ触れ合う領域、そこに生まれる一つの世界に再び焦点をあてる。また、自分と外部との関係にもたらす陰翳の存在について、文章化することで得られたものについて述べる。そして研究を通して派生した別の目線を新たな研究内容として見据え、結びとする。

(博士論文審査結果の要旨)

筆者は、境界や囲いに無作為に生じた「破れ目」の向こう側に、こちら側と同等あるいはより大きな世界の存在を感じ、不安と高揚を覚えるという。その理由と作品化の試みについて論述したのが、本論文である。

筆者のそうしたイメージにもっともピッタリする状況は、たとえば小屋やトンネル、壊れた箱などだ

という。中に何にもない囲われた場や空間、ただしそれは真っ暗な密閉された場ではなく、破れ目から光がもれ差しこむ薄暗闇の場である。いわば不完全な密閉の囲いだが、筆者にとって重要なのは、その境界の通路が人工的で計画的、作為的なものではなく、風化や偶然による自然なもの、つまり「破れ目」であることだ。その光と闇が交錯するグレーゾーンが、本論文タイトルにいう「境界の陰翳」であり、そこに筆者はさまざまな印象のムラを感じるという。言い換えれば、そのムラとは不安や期待、畏怖や憧憬が入りまじる心理の襞ということだろう。その破れ目から内外、明暗、虚実の世界を行き来すること、そしてその境界をこえるときの緊張や高揚感を、筆者が作品化しようとしていることがわかる。筆者が作品化を「雰囲気をつくること」としているのは、あくまで境界そのものよりそのゾーンを表したいと意図しているからだろう。

ただ筆者自身の意識と意思の比重は、じつは明らかに囲いの内側の方にある。とくに筆者が文中で使っている、小屋の内側から破れ目の光を逆光でとらえた挿図の写真は印象的だ。そこには不安も安心も大きく包みこむ胎内感覚に近いものがあり、意識以前の存在への関心も感じさせる。筆者が囲いの場所に感知する「物理的な視覚情報を超えた残像のようなもの」、「常に一定の深さに沈んでいて、ある瞬間に水面に浮いてくる」「別のものに通じているイメージの一片」という存在も、囲いの内側の暗闇の中に潜むものといえる。筆者はそれに不安以上に畏怖と憧憬を感じているが、同時にそれは、外側の光があってこそ意識されるものであり、破れ目がその意識化を促す筆者の起動装置になっていることがわかる。

初め漆芸から出発した筆者が木工に転じた理由にも、木がもつ強さと脆さという両面性や、作者の思い通りにはならない作為の拒否（その意味での無作為性、自然性）が関係しているらしい。漆も木も自然素材だが、漆芸での木は、漆の胎となり通常は見えない。筆者は、場の雰囲気をつくりたいと考えていた彼女にとって、漆の存在感が強すぎたことを指摘しているが、あるいは漆という外側に対して、胎として通常は見えない木の“内側性”も、筆者のイメージに合っていたのかもしれない。

論述は、囲いと境界の規定から、破れ目ももつ意味、木と筆者の関係、陰翳と破れ目の作品化の解説へと進むが、論旨、論述ともに明快でテンポよく進められている。かなり抽象的な筆者独特の感じ方を、他者の文章の引用もほとんどなく論述しているが、筆者の思考の深さを窺わせる言い回しが各所にある。学位論文として十分な内容、質をもつものとして、審査員一同の高い評価を得た。

（作品審査結果の要旨）

平成22年12月15日、博士審査発表展において5名の審査員全員による公開審査を行った。総合作品として展示された3点の作品、「留守の丘」、「闇の伏線」、「contrast」について評価を述べる。

主たる作品「留守の丘」は、4枚の三角形の板を四角錐形に組んだ作品で、頂上はとがらせずに四角い穴となっている。また四方の稜線を栓止めとし、板同士を部分的に完全密着とせずあいている部分があるためわずかな光が中の闇へ差し込む。古代の方墳か、あるいはピラミッドや、寄せ棟造りの屋根であるか、あるいは題名から連想するように土砂を方形に積み上げた整地現場などでよく見かける盛り土の風景でもあろうか。「闇の伏線」は2枚の長い板が長辺を接するように逆V字形に組み立てられて床置きとなっている。屋根の最上部、棟を細長く切り取ったようでもあるし、また遠景のゆるやかな丘の稜線を見るようでもある。この作品も屋根形の頂部に開きがあり、床面からもわずかに浮き上がった状態に設置している。「contrast」は壁面に2つの円形の点が並んでいる。旋盤加工されたものであるが、近くで見ると中がえぐられて中空部分があり、円形の周辺も縁を挽き破って不定形にしている。遠目で見ると同じように見えるのだが、この2つの円形のわずかな差異はある種の引力を生む効果をもたらしている。これら独自の性格を持った、点と線と面による3点の作品が相互に作用する空間は静寂なものであり、上下、左右、前後にたいしてなにかしらの「こぼみ」と「ひきこみ」とを抱かせる造形である。時間の推移をも含めた作品のたたずまいは、見るものに或る気流を感じさせる作品となっており、このことは

とりもなおさず作者が論文で言いたかったことの形象化にはかならない。

論文の主題として述べられているように、囲うことによって生ずるもの、破れ目によって行き来するものなどについて、具体的に眼に見える空間や形態そのものばかりではなく、人の心が有ると感じるもの、来ると感じるもの、行くと感じるものが重要でその感覚を作品の世界に取り込もうとしている。その場合、あちら側とこちら側がはっきりと区画された2者ではなく、それぞれが混ざり合った、またはそれぞれが共有している曖昧な領域があると作者は感じている。

境界つまりあちらとこちらを隔てるもの、陰影がともなうこと、囲いに破れ目が生じることに日常の生活や作品制作を通して着目し、造形表現として可視化しようとすることは大きな独自性を持った方向である。木が根源的に持っている素材感とも相まって、より多彩な木工芸の表現を示唆することに成功をおさめている。もともと物体は空間の中に存在するものであるが、作者は物体同士の相互作用による空間を創造することと同じ重さで、あるいはそれ以上に物体つまり作品そのものの形態をつきつめるといって造形姿勢を崩さないところに、しっかりした作品を生む根源があるといえる。

以上述べたように作品は論文の趣旨ときわめて整合性を持ち、従来の工芸観でいわれる「工芸即用、技即美」という立場から自己も作品も解放し、かつ、伝統的な木工技術の修練と継承に立ちながら、より心象に重点を置いた工芸としての造形表現を目指したことにおいて優れた作品となっており、博士学位授与にふさわしい成果であると評価する。

(総合審査結果の要旨)

平成22年12月15日、博士審査発表展において5名の審査員全員により、論文と作品について公開審査を行った。すでに10月25日に審査員全員により、それ以前から個別指導を主査、副査ともに数回にわたって行っている。

本学における課程博士の審査は申請者の造形思考と論理が、研究作品にいかにか明快に投影されて整合性を持っているかが要点であり、作品自体の優れた表現と内容が要求される。審査経過は博士論文と研究作品それぞれの内容の高さ、独自性、充実度、整合性等について審査した。最終的な総合審査は平成23年1月6日におこなわれ、引き続き口述による最終試験をおこなった。以下のとおりである。

論文は4つの章からなり、1章では「境界」と「囲い」について言葉の解釈と、これらが筆者にとっていかなる意味を持つのかについて、2章では、前章で語られたことの心理的要素や背景を、不安定感、違和感、時の推移等とからめながら「囲い」に現れる「破れ目」がもたらす心理的特徴について、3章では木を素材とする制作をするにあたり、木とはいかなるものであるか、木とどう向き合っているのかを述べ、手と道具と技術と心のありようについて具体的な制作の場面と、生ずる作者との関係を述べる。4章では提出作品において、実際に「境界の陰翳」と「囲いの破れ目」をどのように作品化していくのかについて、作品が仮の姿として存在することや、ばらばらの部分に分解してもそこに素材(板)としての意志を感じることなどを解説してゆく、という構成である。テーマ自体はたいへん民俗学的な色彩を持つが、筆者はそれを分析して分けていこうとしているのではない。囲いや境界が持つ可視の約束と、破れ目によって行き来するなにか不安定で流動的な、どちらにも属するような或る感じるものを謎は謎のまま受け入れる。こちら側からはあちら側が、あちら側からはこちら側が、意識としてはつながっていること、つながりのグレーゾーンとしての、曖昧な、双方が干渉し合う領域を認識することが心理的にも空間的にも大事な要素であることを、自己の作品世界にどのように具現化するかに腐心している。

作品「留守の丘」は、三角形の板によって4面囲われた方墳のような形態の作品である。「闇の伏線」は2枚の細長い板が屋根形に組まれたものである。「contrast」は旋盤による回転体の、一見皿状の突起物が2つの点のように壁面に設置されている。いずれも逃れられない工作上の技術的加工痕や、構造を保持するための仕掛けが要所に散在する。表面は何度も削られまたその削り痕は消し去られ、色が塗ら

れまたその色は削られ、表面と中身と裏側が作者の感じる抜き差しならぬ関係に行き付いた時、作者はやっと道具を置くことが出来る。最終的には全体が沈んだ黒い色調となり、刃物痕や、接合の仕掛けや、小さな突起や段差そのものが板の中身に食い込む。それは裏側にまで滲み込んで、裏は裏の姿に変わってゆく。作者は、表に隠された裏、裏によって支えられる表、を強く意識した造形を求めているのである。かなり以前から作者の作品制作の出発は、形態的にすでに表と裏という二面性を持った板材を主として用いている。複数の板で造形が始まると、木工技術から言えばそれを組むことは自然の成り行きである。この時、板で囲う形が作られて行くわけだが、密閉されていること、開けられること、開いていること、破れていることなどの状況から、心理的、空間的にさまざまな意味を感じることは経験的に誰にもあることだろう。照明を極力おさえた展示空間には確かに静まった陰影を感じるし、淡い光線は陰影の中を行き来する。見る人の心もあちらへ行き、こちらへ来る、曖昧な領域をさまようのであろうか。あちら側の闇に包まれた不可視の何者かを感じ取り、心身に引き寄せ自身の存在の一側面として同一化の思いさえ伝わってくる。論文の主旨と作品とは整合性が認められ、組むこと、彫ること、道具と手と素材とに、あきらかなこだわりを抱きながら表現としては抑制を意識し、哲学的な世界さえ感じさせる優れた仕上がりとなっている。

以上のことから審査員全員一致して、申請者に対して論文・作品ともに優秀であり、博士学位授与にふさわしい研究成果に至っていると判定し合格とする。